



孫家園文集

後編

卷

八遠13
2475
21



早稲田天壽山版

電話 三三三三
三三三三
三三三三



傳記

福舎見聞志 海編想貝録

卷之三

物故の清家哲也後の事

并本道流の事と其の事

卷之三

判石代隆家系図と其の事

并堤原系図の事と其の事

門へ遠13
番 2475
巻 21

かハの お ぢ 牛
い ま け 人 屋
あ め つ ら

三平二福



大正六年一月五日寄
本校出版部 贈

一 京時隱居と舎ら中集の及

巻之三

一 却時諸士より多佛と説く及

一 兼松原京時却之と説く及

一 刻村が事ありて諸士存足の及

一 兼松原京時却之と説く及

巻之四

一 藤が足史廊ありて諸士抑多約と説く及

一 兼松原京時却之と説く及

一 諸士連て京時々而忍と説く及

一 兼松原又子隆余を説く及

巻之五

一 美登の能ありて諸士存足の及

一 兼北条時政明村と説く及

一 梶原又子海客と出好の事
并 源をた事の尉京季宗と津又

卷之八

一 若場右左衛門忠比呂ら又

并 惟弘是信者場と純向の事

一 依木信美木村の家と信く又

并 若場右左衛門純死の事

卷之七

一 新時又子京刺合戦の事

并 梶原且長殿その事

一 判事代隆京生押す事

并 利和尉胡京隆系の事

卷之八

一 波多中成右衛門七郎と生押す事

系 主をたもつて去りて其の位をとりて

系 原をとりて保生神なりと云

系 赤村伝実忠美法流なりと云

巻之九

一 秋 四郎長持 謀反の事

系 長持 院意と云ふ事と云

の事

一 小 相改 操也云々と云

系 長持 系統と云ふ事と云

巻之十

一 吉 原の元 長持を偏りと云

系 長持 四郎長持 白雲の事

一 城 四郎 治男 隆之丞 及 隆之丞の事

系 隆之丞 隆之丞 隆之丞の事

卷三拾七

一 登保入道台伯の故と君ら文

系 伯親沙不謀行勇然の文

一 美遠清親伯親女と祢らるる文

系 孝子の清親の娘平の文

考之拾貳

一 城中藤村評定の文

系 伯親女孝子と謀り方止る文

一 依来之入道保計の文

系 城守藤村よお押て遊軍の文

考之拾三

一 多伯藤城守成之元朝の文

系 伯親行善生梅らるる文

一 伯親女藤家より向の文

系 河内郡市原村と

考之

江原を仰

系 新田入

荏孫を

系 仁田

考之

比 企判

系 北系

謀

能 負

系 名

考之

牧 の

一 赤仁田の解太常候之の受

一 大令右柳原沖原候の受

一 系 系別部長候軍之下の受

一 系 系之指也

一 柳原之御番軍と謀らる受

一 系 大令右柳原軍之氣相受

一 系 系之指八

一 白土の解太常守相候と謀らる受

一 系 相候白土守と謀らる受

一 物の系に太常と謀らんと謀らる受

一 系 柳原を力する好計と謀らる受

一 系 系之指九

一 北条時政白土と謀らるの受

一 系 系之御保曾我と謀らる受

糸糸登之方下の糸糸と連らば

糸糸曲之陸然不糸のり

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸之式拾に

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸保如口た揚つ府也之と並らば

糸糸之式拾に

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

糸糸如口た揚つ府也之と並らば

孝之式拾五

一 孝人相親かや孝逆免の文

一 系 少麻鳩と業好帰と孝の文

一 孝多る時わいと後とる文

忠目錄

大記 海軍見聞志海編巻之三

物家つ御家惣お徳の文

系 孝を誦九節孝を考ふ文

人皇八代三代後土御院 清仁高仁海軍御徳

二月十日秋 四年三月廿五日 の御宇正治元年二月十三日 孫

倉石右将物部公清化界より

上より下万民より

忠親の汝よりへく晴夜子たちとて
 うち見いゆがしむるみだれよてども
 伊波智の君に物取て十八歳は後しむ
 ても伊つ葉の芽も伊波智のまじりぬ
 すで伊遠よりよまらぬも物取つと作
 隆半の半いしりよあふむだ日本に海
 路へしてよのさるかしのまを偏し
 高僧軍の伊る器い法花書よあはし

ずし一掃長考漢の討殺佛軍の守師
 とて七日と申すもあふむく日
 京師よなり一禁中の伊沙伝し
 物取てた半将は任むらるあまぬ
 言りよる仁夷将軍源の相後の速
 功と法をいりては家の所末は
 下し流西の守傳とすゆきむべし
 初徒ありしこの杖二月六日

せーくぶ 欽の平の侍候む侍家人も
まきく 大親の公とてまきくして 柳家のと
多助一 二代将軍と仰ふくち候むに
柳家のしきまは 柳家年くらまはして
清海宿のまは 自らまきく政のまきと
らと 白儀大少奉とも 北条よのまき子
情守房元を夫の道 長位掃部頭
高村 二浦女を 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
上京

企石場 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
平三 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
此場の 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
り 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
海征の 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
新よ 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
公高 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の
く 柳家の 柳家の 柳家の 柳家の

集して多れをりし洋師はあまも是
よりして近年は國臣を撰集する
よらして属入道官位の家はあわて交
断せりしをりしをばくばく新造を
ましつゝあまも北より老臣のりん
たぬとけしし親戚のふとあて改奉
とあまもふけし中將抑ぬるを情成
りのも世生得らるるが改道ははつらうは

うらままだぬをりしを改奉と書かるとい
うらが多し居る入道まゝあが及官おま
ゆら師を改奉とせしむるは人の身
ぬとまゝ改奉とせしむるは人の身
成物あまははしし改奉といふと
みせらまゝ改奉といふは人の身
しとせしむるは人の身
しとせしむるは人の身

しなきを^{さゆた}と^{さゆた}と^{さゆた}と^{さゆた}と
正^{まさ}なる^{まじ}と^{まじ}と^{まじ}と^{まじ}と
女の^めの^の件^{けん}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
お^おの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
く^く信^{しん}守^{しゅ}の^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
高^{たか}と^と返^{へん}本^{ほん}と^とり^りも^もら^らな^ない^い事^{こと}も^もあ^あら^らず
み^みの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
お^おの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}

法^{ほふ}の^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
と^とま^まの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
お^おの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
同^{どう}年^{ねん}の^の七^{しち}月^{げつ}十^{じゅう}三^{さん}日^{にち}之^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
お^おの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
その^{その}事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
の^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}
お^おの^の事^{こと}一^{いつ}法^{ほふ}毎^{まい}と^と法^{ほふ}の^の事^{こと}

一 多付とくもあらざりて
一 目物物にさかるといふ
おまじらふもよらふもい
る九節燈長かす深のあがり
憚九節燈を深にけりて
とづきしるを命をらる老
とそと理の面然のる由
すともさく心のせよ難
かたりしむ

おつまたなまよとけり
城をさくどけり氣色
威い何のあがりて
老はえん諸人と
を平とえらるか
道と老人と
かろるとして
はくるとも

あつしり白一割ちんこまらるゝ大徳かて叶
ひがと一何者ぬあゝとららあをぞんか
とらうぞあゝ伊ちひる作天一徳
よあそとらたちひるしあまは
よふもあめまら音徳とまをつらよ
あまら一のこあだ何よこらあま一知
らまら衆小思と解並くららとあ
くらし一花舞ま信はあの中らら

かあをちあまを失ひ一徳まらよ
あまを散らまお柳一柱氣あま
あまららあまあまととてあま一彼
あまをんまあまらまらあま
り一あまもあまらあまは徳あ
ど一あまありあまらあまはあまの
あまのみとあまらあまらあまは
平三京時あまをあまらあまはあま

毎層の判友休陰をと後らふの深云
成りくくろ海を安運海九層と相
友りひを云河のあふるとゆ年の等くと戸
さんとして集登がまよとくると海西くろ
よ集登廿のよとちひの厚食と海一
らふくふ所懐の懐りらふ海重何氣
ろくを来子ゆ名の懐物子あふび不
懐の懐子とくげ海一くは集登朋友

のまの陰とくまよけらげやき集登
うごまきその在高をまざるよとく
沢の遊りて海重所高りそくろあそ
其系安あふとくこの巴のな徳推をいじ
信ふがも信女と名化の為子信と事し
あそゆるまど我をふらふおまあふと
あふともあふあふとあふとあふと
とくりあをま集登をそふあて其えり比

大塚の物と云ひくると其雅事と申す
さうも我らが昔過ると云ふ所の一と知れんに
身縁々々々々陰をわたりたりして成程
つとて見たりと指す一すかりを百奉
包と指すともゆらだ然まとも妙多計
くくち知かりまの口外の多難多事
おのあふふふと云ふことをあふふとて余
と悟るゝると會士のあらむららとも罷る

と死と云ふは又は悟りて白化なり
かゝる一と云ふが思来の里天には其人と
あつていともむらやゆきを今世くゆのみ
あのたうらえまら一と云ふは某一があつて
さうばと云ふ一と云ふは子の所のあつて
由一と云ふ一と云ふは一と云ふは
物ともと云ふ一と云ふは一と云ふは

鎌倉見少志海編考ら之を

